



菜の花



川崎ゆきお

「菜の花が生けてあるのですよ」

「もう春ですなあ」

「そういう季節の話ではなく、部屋の中に菜の花が生けてあるのですよ」

「生け花でしょ」

「お花の師匠が菜の花を生けたのではなく、誰かが切って来て、花瓶の中に差し入れたものです」

「それが何か」

「不思議なんです」

「どうして？ 普通でしょ」

「菜の花を西洋花瓶に生けているが、菜の花だけなんです」

「ああ、あるじゃないですか。薔薇の花だけを花瓶に生けるとか」

「結構大きい目の花瓶でしてなあ。いつもは何もない。花瓶だけです。だから、花瓶の置物です。白くて、つやつやした丸い花瓶でしてねえ。まあ、壺のような ものですよ。だから、この花瓶、鑑賞用なのです。それが驚くじゃありませんか、水を入れ、花を差しておる。しかも野に出ればいくらでもありそうな菜の花ですよ。これは売っているのかなあ、花屋に」

「あると思いますよ。菜の花漬けも売ってますよ。旬の食べ物ですよ」

「それはいいが、水など入れたことのない花瓶に花です。これは私から言えば異変ですよ」

「はいはい。でも特に変なことはないですよ。花瓶に花、しかも季節物の菜の花。普通じゃないですか」

「菜の花の本数も多いです。花は三十ほど咲いていました。真黄色です」

「それがどうして、妙なのですか」

「だって、その菜の花、外に出ればいくらでも咲いている」

「だから、それを切って来たのでしょ」

「そうだと思うが」

「菜の花に関して、何か忌まわしい思い出でも」

「ないです。菜の花には好意を抱いています。好きな花です。かなり」

「じゃ、丁度いいじゃないですか。部屋の中に、そのあなたの好きな菜の花がある。外に出なくても、見ることが出来る」

「違うのです。あれは野の花でしてな。部屋で飾るものじゃない。また、部屋で見るものじゃない」

「ほう」

「中に入れてはまずい花なのじゃ」

「はいはい。ご家族の誰かが、お爺さんを喜ばそうと、生けたのでしょ」

「家族はおらんし、わしの部屋まで入り込む奴などおらん」

「はあ」

「だから、妙だと言ってるじゃないか、さっきから」

「それは」

了